

平成 29 年度 FD 実施報告書

研究科・学部・学科	流通科学研究科
FD 取り組みへの理念・目標 流通科学研究科で修士号を取得した者についての「質の保証」という点で「修士（流通科学）」にふさわしい人材を育成することを理念として、それを達成するための教員の教育研究および研究科としての教育内容の充実が目標である。ただし、両方とも学部との関連があるため、学部との連携で FD を実施することが流通科学研究科の FD の基本と考える。	
回数、期間、 実施日等	実施事項・内容、実施組織、評価項目等
第 1 回 <u>(5 月 10 日)</u>	「3 ポリシーと修士論文の指導・審査について」 大学院のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシーおよびディプロマポリシーについて、内容を確認し、周知徹底を図った。また、これらポリシーについて、将来に向けて検討していくという方向性も確認できた。
第 2 回 <u>(7 月 5 日)</u>	「研究指導のあり方について①」 修士論文および博士論文指導について長く幅広いご経験を有する甲斐諭学長を講師として、その指導方法や指導方針について、ご教示いただいた。「常に学生に寄り添う」という指導方法・方針が大切であるということを知ることが出来た。
第 3 回 <u>(11 月 1 日)</u>	「研究指導のあり方について②」 同一テーマ 2 回目は、本学で多くの修士修了生を排出している新茂則先生を講師として、その指導方法や指導方針について、ご教示いただいた。学生のやる気を引出し、常にアドバイスを行うことの大切さを知ることが出来た。
第 4 回 <u>(2 月 7 日)</u>	「流通科学研究科平成 29 年度の回顧と平成 30 年度の展望」 修士論文指導の 2 年間の経緯と成果について、研究指導教員および研究指導補助教員に、それぞれ報告と問題提起をお願いした。報告および問題提起は修士論文の主査・副査を務めた、山田教授、朴准教授、甲斐学長が担当した。議論の中で、次の点が課題として浮き彫りとなった。 ・論文の品質に差がある。 - つまり、学生に個人差があるため、個別指導が大切である。 ・中間報告から最終報告までの間で、指導を強化すべきである。 ・外国人留学生の日本語能力の向上を図る必要性がある。 これらの点は次年度に向けての課題となった。

「教育システム改革 2014 (FD2014)」の進捗状況 （大学院は該当する項目のみ記入）

項目	主な実施内容	進捗状況	補足説明
体系的な教育課程の編成	ナンバリングの導入	☐ 未着手 ☒ 検討中 ☐ 実施中 ☐ 実施済	基本的に大学院運営委員にて検討していく。
授業科目の組織的な管理	ルーブリックの導入	☐ 未着手 ☒ 検討中 ☐ 実施中 ☐ 実施済	基本的に大学院運営委員にて検討していく。
教員の教育力に対する評価の導入	授業アンケート結果の組織的な活用	☐ 未着手 ☐ 検討中 ☐ 実施中 ☒ 実施済	アンケート調査結果の各教員へのフィードバックを実施。
教育方法の改善	アクティブラーニング（特にPBL）の推進 PBL：課題解決型授業	☐ 未着手 ☐ 検討中 ☐ 実施中 ☒ 実施済	流通科学特別実習にて、指導教員の指導により実施し、報告書を作成。
グローバル教育の推進	グローバル教育の導入	☐ 未着手 ☐ 検討中 ☒ 実施中 ☐ 実施済	国際コミュニケーション特論の科目内容の充実及び次年度より英語版シラバスの作成を実施。
高大接続教育の推進	高大接続教育の推進	☐ 未着手 ☐ 検討中 ☐ 実施中 ☐ 実施済	該当なし